

保護者の皆様

札幌市立北郷小学校

校長 近江 慎也

「全国学力・学習状況調査」における 本校児童の結果と課題、改善方向について

晩秋の候、保護者の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。また、日頃より本校の教育活動に深いご理解とご協力を賜り心より感謝申し上げます。

さて、4月 23 日(木)に6年生児童を対象に実施いたしました「全国学力・学習状況調査」につきまして、本校の結果と課題、改善の方向がまとまりましたので、お知らせいたします。

本 校 の 概 要

国 語

- 〔知識及び技能〕の「言葉の特徴や使い方に関する事項」「情報の扱い方に関する事項」、「我が国の言語文化に関する事項」の内容で、正答率は、全国平均を下回っている。
- 〔思考力、判断力、表現力等〕の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の内容で、正答率は、全国平均を下回っている。

算 数

- 「数と計算」「図形」「測定」「変化と関係」「データの活用」のすべての領域で、正答率が全国平均を下回っている。
- ・特に、「図形」の「直方体の箱の形の六つの面の縦と横の長さを求める」問題や、「直方体の箱の送料を求める」問題の正答率が低かった。
 - ・「データの活用」の領域における、短答式の問題が、正答率が全国平均より下回っていた。

今回の調査における課題

- 目的や相手に応じて文章全体の構成を考え、情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。
- 目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討すること。
- 漢字など、言語に関する知識を深め、適切に書いたり、活用したりすること。

- 直方体の箱の形を構成する面について理解を深めたり、三つの辺の長さを捉え、調べたい数量の求め方を数や言葉を用いて記述したりすること。
- 百分率で表された割合と比較量から、基準量を求めること。
例) イシガメ 14 匹が動物園全体のカメの数の 20%に当たるとき、動物園全体のカメの数を求める式と答えを書く。
- 示された二つの表から、集計に誤りのある項目を見付けること。

改 善 の 方 向

- 資料と関連付けながら文章を読み取ったり、目的に応じて文章全体から重要な語や文に必要な語や文を選び、端的に説明したりする学習活動の充実。
- 目的を明確にして、得た情報と自分の考えを比較しながら取材を行うことや、取材で得た知識や情報を分類したり関係付けたりしながら、自分の考えをまとめていく学習活動の充実。
- 漢字のもつ意味を考えながら、文や文章の中での正しい使い方を習得できる学習活動の充実。

- 図形を構成する要素に着目し、立方体や直方体の体積が、縦、横、高さの長さを使って計算で求められることを理解できるようにする学習活動の充実。
- 問題場面から、基準量、比較量、割合の関係を捉えることができるようにする学習活動の充実。その際、何が基準量にあたるのかを把握し、計算に結び付けていく。
- 資料を分類整理する際に、各表の数値の妥当性を確認する活動を取り入れていく。

↓ 裏に続きます。

児童質問紙～学習・生活の様子

■ 基本的な生活習慣、読書週間について

「平日にどのくらいテレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、スマホなどを使ったゲームを含む）をしているか」「平日にどのくらいスマホなどでSNSや動画視聴などを行っているか」の問いについて、その時間が全国平均を大きく上回っていました。夜遅くまで起きていたり、寝るぎりぎりまでSNSや動画視聴をしていたりするということが、学年が上がるにしたがって増えてきているようです。また、「**学校の授業時間以外に、普段、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか**」の問いについては、「全くしない」と回答した割合が、全国平均を大きく上回る結果でした。

■ 人間尊重の教育に係る質問について

「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」や「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」の問いについて、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合が、全国平均を上回りました。北郷小学校が「人間尊重の教育」として、「子ども一人一人が自分が大切にされている」と実感できる教育を継続して推進してきた成果が表れていると考えられます。

■ 自己有用感、自己肯定感等について

「自分にはよいところがある」の問いについては、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合が、全国平均を上回りました。また、「**普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか**」の問いについては、「当てはまる」と回答した割合が、全国平均を大きく上回りました。自己有用感は、周囲との関係性の中で「自分は必要な存在だ」と感じることで生まれます。主観的ウェルビーイングは、感情的な満足度と人生に対する納得感から構成されます。学校における全ての教育活動を通して多様な他者と対話し、合意形成や意思決定を図る活動を充実させることで、相互承認の感度を高めていきたいと考えます。

■ 学習習慣について

『**学校の授業以外の学習時間**』や「**分からないことや詳しく知りたいことがあったとき**」に、**自分で学び方を考え、工夫することができているか**』の問いについては全国平均を大きく下回っていました。家庭学習の時間や取り組み方、児童自ら主体的に学びに向かう取り組み方については、保護者の方々にお知らせしたり、子どもたちにも習慣化を進めたり、価値付けたりすることを繰り返すなど、継続して取り組んでいく必要があると考えます。

昨年度と同様に令和8年度の全国学力・学習状況調査においても、ゲームやSNS、動画視聴の時間が全国平均よりも非常に多いことが結果として表れました。お子様の健康を守るためにも使用時間について考えていく必要があります。あわせて、情報モラル教育についても、各家庭での協力が必要となります。学校では、今年度から、生活科と総合的な学習の時間の中で「情報教育」を位置付け、系統的な指導を開始しました。また、クロームブックの持ち帰りを進め、活用を広げていくことに取り組んでいます。今後も、学校から情報提供を積極的に行い、ICTのよりよい活用を広げていくことを進めていきます。

さらに、「よいところを認めてくれている」と「自分にはよいところがある」の項目に関して、「一人一人が大切にされている」と実感できる学校づくりに向けて、『プラスのまほう』を合言葉に、家庭と連携して取り組んできた成果が出てきました。継続して保護者の皆様と、更に共通理解を図っていきたいと考えております。今後とも、ご理解ご協力をよろしくお願いいたします。